

神怡務閑

藤 森 大 雅 (大 節)

FUJIMORI Hiramasa (Daisetsu)

本作は楷書による小作品をテーマに制作したものである。

一作目は啓功氏の『論書絶句一百首』所収の「張猛龍碑」と題する七言絶句を揮毫したものである。二〇二二年は張猛龍碑が建碑されて一五〇〇年の節目に当たる。この機会に日頃から学んでいる張猛龍碑を題材とした作品を形にしたいと考えていたが、良い題材が用意できず時間だけが過ぎてしまった。ある日、『論書絶句一百首』

に張猛龍碑を題材にした詩があったことを思い出した。『論書絶句一百首』は漢代から現代までの書人や古典などをテーマに、その内容について七言絶句の形式で表現し、注釈を加えたものである。啓功氏の書法史に対する造詣の深さ、文人的素養の高さを知ることができる名著であり、中国留学した際に指導教授から薦められて購入した思い出の一冊である。ここに収める「張猛龍碑」と題する詩は六首あり、ここから詩の内容と字面を考慮して一首を選んだ。

書体は楷書、半切半分ほどの紙を縦置きに使用し、四行で纏める

ことにした。啓功氏が「強心健骨」と評するように、張猛龍碑の強く健やかな趣を表現しようと試みた。これまで繰り返し臨書して自分の中に形成されたものをベースに、力強い点画と大小長短変化に富んだ文字構造を意識した。文字の大きさはやや小さめだが、それを感じさせない、伸びやかな線質を求め、大きな運筆で一気呵成に書き上げたものである。

二作目は『論語』の「言可履」（言は履むべきなり）の三文字を色紙サイズの紙に揮毫したものである。言葉は正しく履行できるものでなくてはならないという意味である。『論語』の内容は含蓄があり、非常に魅力を感じていながら、作品の題材とすることにはこれまで消極的であった。多くの先人が書いているため、そのイメージが自分の中に残っていたり、それらと比較されるためである。「言可履」の三字はその時の心情に響くものがあり、その段階では発表する予定になかったこともあって題材に選んだ。

書体は楷書、手頃に飾ることが可能な色紙を選択した。色紙は小作品として最も馴染みのある形式であり、縦横比が異なる点で紙面構成に応用が効く点も都合が良い。言葉に触発されたおかげで完成のイメージはすぐに出来上がった。厳しく強い線質、大胆な潤濁のコントラスト、文字の大小の変化を意識して一気に書き上げた。縦置き、横置き両方試してみたが、余白のバランスがよりイメージに近かった縦置きの作品を一点選んだ。

この二作品は年末の空いた時間に、その時の気分に合わせて一気に書いたものである。制作にあたっては脳裏に浮かんだ新鮮なイメージを大切にしたいと思い、準備した数枚の中で仕上げることに決めた。思えば、作品制作は公募展など、発表を目的としたものがほとんどであり、今回のようにふと思いついて制作した記憶はない。発表の場があり、作品の締め切り日に向けてひたすら制作を繰り返すのとは異なり、純粹に自分と向き合って創り上げた作品には、飾ることのない、ありのままの自分が表れているように感じられた。

書き終えてから、『書譜』の「神怡務閑なり」の一節がふと浮かんだ。書作に適した好条件である「五合」の一つで、心が和らぎ仕事が暇なときを意味する。今回の制作で良い書が書けたかとはともかく、時間に追われず穏やかな気持ちで筆を執ることは心地良く感じられた。時間の余裕は心のゆとりに通じる。書に書き手の心が表

れるとすれば、「神怡務閑」は非常に大切な条件であると感じた。

しかし、このような条件は得難い。作品発表は締め切り日が決まっているため、制作期間中に「神怡務閑」の条件が訪れるとは限らない。捻出した時間の中で如何に効率よく制作できるかに懸かっている。必然的に書かなければならない状況下で少しでも良い作品を仕上げるためには、日頃の準備が大切である。

先に引いた『書譜』の一節の続きには「時を得るは器を得るに如かず。器を得るは志を得るに如かず」と記されている。いつ来るかわからない好条件を待つよりも、今できる準備をすることの大切さを『書譜』は教えてくれている。今回の制作を通じて再確認することができた。



60×35cm

出墨無端又入揚
前摹松雪後香光
如今只愛張神國
一劑強心健骨方



言可履

23.8 × 26.9cm